

上田市施策担当者の「講座実践」

—「居場所」づくりの視点から



清水嘉永

上田市市民生活部市民課主査

はじめに

私は、2010年5月の異動により市民課の外国人政策担当となったばかりで、半年ほどの経験しかない。しかし、上田市として初めて開講した「外国につながる子どもサポートボランティア入門講座」と、3年目となる「ステップアップ講座」を担当し、毎回受講者と一緒に講座に参加してきた。そして、講座終了後に意欲あるボランティアの方達と、試行錯誤しながら第二世代育成につながる新たな「居場所づくり」を模索している。

この2つの講座の理論的枠組みは、本冊における山辺論考に述べられている。本稿では、それをどのように実践したのか、また、私自身がどのように感じたのかなどについて述べる。

1 第二世代育成の視点から「居場所」をテーマに講座開催

10年度は、それまでの日本語ボランティア入門講座とは異なり、「第二世代の育成」と「居場所づくり」をキーワードとする「外国につながる子どもサポートボランティア入門講座」（以下「入門講座」という）として開催した。文字どおり一般的な内容とは異なることから、応募者は少ないのではないかと予想してい

たが、50人を超える応募があった。

講座は、今まで同様グループワークによる「参加型学習」を基に、毎回「居場所」についてさまざまな視点から討議し、新たな発見をしながら学んでいくものだった。この講座の特色は、日系人や日系人の妻などで教育現場等に携わる人や、子どもの保護者による「運営サポート隊」をつくり、毎回の講座ごとに実際の当事者から話をしてもらう機会を設けたことである。講座の参加者は、運営サポート隊の当事者から彼らが日本へ来て感じたこと、日常生活の実態や考えを直接聞くことができた。

講座の手法は、「参加型学習」を基本に据えていた。講義を終えた後に受講者から提出してもらった「ひとこと感想」をみると、「グループの方々と親しく話し合うことができて良かった」や「いろいろな視点で意見を聞いて良かった」など参加者同士の意見交換が刺激的であるとの感想があった。一方、「講師の話をもっと聞きたかった」や「グループ討議に十分な時間がなかった」などの否定的な感想もあった。中には「ボランティアにこれ程の知識が必要なのか」や「もっと実践的な内容の講座を」など講座そのものに対する疑問や要望の声があった。その時点で、担当者として、講座への不安を感じた。そこで、友人である受講者に直接話を聞いてみると、「以前も同じような講義を聞いた経験があるが、実践に生かされなかった。もっと実践に役立つ具体的な内容が必要だと思う」との衝撃的な意見に驚き、気持ちが揺れ動いた。そこで、4回目の講座において受講者全員にアンケートを行ってみた。すると、回答には、「講座の内容は非常におもしろかった」や「グループの方々と親しく話ができ、自由な意見発表ができて良かった」「自分一人では思いつくこともできないが、皆さんの考えの豊かさに学ぶことが多かった」などの感想が多く、抱いていた不安は一気に解消された。

後半の講座は、より具体化された内容で展開され、受講者からの肯定的な感想はさらに増えた。この雰囲気の変化は正に講座で学んでいた「居場所」に近づいてきたのではないかと感じた。そこで私は、最終回の前の回に、お互いの情報交換を意図して、ひとつの仕掛けをしてみた。講座終了後に茶話会を開いてみたのである。すると、大いに盛り上がった会になり、この影響を受けてか、最終回の講座では、かつてないほど盛り上がり活発な意見交換が行われた。

2 地域日本語教室における「居場所感」

日本語ボランティアのスキルアップを目指した「ステップアップ講座」は、10月から開催した。地域日本語教室のスタッフはもとより、過去の入門講座等の受

講者にも講座の案内を送付し募集した。しかし、一部の地域日本語教室の活動日である土曜日の講座であること、経験者向けの講座内容であることから参加者は少なめの15人であった。

このステップアップ講座では、「生活マップ」をツールとして生活の場を話題に「対話型」の学習方法を学びながら、「居場所づくり」につなげていこうとしていた。また、経験者から要望の多かった日本語文法の基本についても触れることができ、好評だった。受講者の「居場所感」は、安心、解放、安住できる場（家庭、学校、職場など）などであり、漠然とした共通認識は持っていた。地域日本語教室の学習者をこの視点から見ると、教室終了後の雑談に花が咲くなど「居場所」となっているようだとの意見もあった。一方、日本語ボランティアにとっての地域日本語教室は「居場所」になっているか問うてみると、長年教室を担っているスタッフは「苦痛の場になっている」あるいは「行かないと教室が始まらない」など「常に気に掛かっている場」であるとの意見が多かった。自分が教室を支えているという自負が「居場所感」につながらないのは、自分を抑えた活動をしているからだだろうか。責任感に押しつぶされそうになっているボランティアの姿が垣間見える発言だった。ただ、「居場所づくり尺度アンケート」では、上田市のボランティアスタッフの「居場所感」は高いという結果が出たので、講座での発言が全体的な傾向とは限らないと思われる。また、地域日本語教室によっては個人指導が主体で、「参加型学習」の導入が難しいとの意見もあった。一方、新たな手法を試みることで、教室が「居場所」へ近づく可能性を秘めていることも認識された。

3 講座受講後の新たな活動に向けて

私達は、「入門講座」の中で講座終了後に何らかのボランティア活動につなげたいというメッセージを出し続けてきた。講座が終わり、ボランティア活動につながる話し合いに参加したのは13人であった。もう少し集まるのではないかと期待感もあったが、現実には厳しかった。そんな折、東京外国大学社会連携事業室主催の多言語・多文化社会専門人材養成講座（多文化社会コーディネーターコース）を受講していたことから、杉澤プログラムコーディネーターにこのことを相談すると、養成講座で学んでいるはずの「人と人をつなげるには自分の言葉で伝える」ことを実践していないからだと言われ、助言を受け、目が覚める思いだった。行政主催の会議のお知らせは、常に通知文で事足りていたので、その固定概念に捉われるあまり、大事なことが見えていなかったことに気がついた。その後、職場に

戻って電話を掛けまくり、次回の話し合いでは新たに8人が加わり総勢20人を超える活動となった。同時に、受講者から講座に対する意見や感想なども直接聞くことができた。

新しいボランティア活動を目指した話し合いの中では、その活動内容が議論の中心となった。講座の中では、「居場所」につながるボランティア活動のイメージを描いていても、具体的にどういう場にするのか、何を目標として取り組むのかが決まらなかった。話し合いは2回開催したが、この時点では残念ながら実践活動までに至らなかった。そうこうするうちに、ステップアップ講座が開講となり、新たなボランティア活動を目指しているグループからも受講者が多かったことから、毎回のステップアップ講座が終わった後に、雑談のような形で話し合いを続けることができた。時には、講座の講師が引き続きアドバイザーとなり、活発な意見交換が行われた。

話し合いにおいては、子どもにとって「居場所」が必要であるということで参加者の意見は一致していたが、悩みは具体的にどういう場を設けたらよいのか不透明で、将来的な方向性が見えてこない点であった。話し合いを続ける中から、子どもたちのみならず同伴の保護者やボランティアも楽しいと思える場でなければ継続しない、との考えの一致に至り、日本語学習を取り入れながら遊びやゲームを主体とした「居場所」をつくっていこうということになった。

記念すべき初めての活動は10月31日に実施した。市内の小学校で日本語教室に通う児童を中心に募集したところ、ブラジルや韓国、タイなどの外国籍の子どもたち約20人と保護者やボランティアを加えると総勢50人程が集まった。ワークショップでは、「みんなであそぼう」をテーマに、カポエイラ¹を皆で体験し、その後にジャンケン列車²やドッチビー³をして遊んだ。初めての開催でもあったので、まずは楽しいと思える場づくりをねらいとしたが、親子で汗をかき皆が楽しんで盛況に終わることができた。

終了後には、普段は学校でも友達がいなくて困っているという子が自由に遊んでいる子どもたちの仲間に入り、子どもたち同士で考えた遊びで飛び跳ねていた。その姿に、保護者もボランティアも、そして私自身も感動していた。国籍は互いに違うが、共通語となった日本語でコミュニケーションがとれている状況が見受けられた。また、後日、参加した子どもたちの通う学校で、スタッフとして参加した日本語教室担当の先生が、子どもたちから「次の会はいつあるの」と毎日聞かれて困っているとの嬉しい報告もあった。これらのことから、このワークショップがひとつの「居場所」になりつつあることを実感した。

今回は、アシエダンス⁴とゲームを中心に、日本語を取り入れたものとして伝言ゲームなどを企画している。まだ、会の名前すら決まっていないグループであるが、まず実践ありきの活動をしなが、参加者やボランティアにとって理想の「居場所」を追求しようとしている。



4 「居場所づくり」の実践活動の成果

ワークショップで遊ぶ外国籍の子どもたち

10年度の2つの講座は、「居場所」をテーマに実施されたが、受講者や私自身にとっても、普段あまり意識してこなかったキーワードだったので、ある意味新鮮でもあった。講座を進める中で、「居場所」とは物理的なスペースだけでなく、心の拠り所や自己表現ができる場など、さまざまな要素が含まれていることを徐々に理解しつつも、私自身いまだに明確な答えが出せない奥深いものがあると感じている。

「入門講座」では、外国籍児童生徒を持つ保護者を中心とした6人の「運営サポート隊」が参加した。講座の中でこの6人が語る熱い思いに受講者は真剣に耳を傾け、彼らがおかれている実態をリアルに感じ取ったようだ。「運営サポート隊」はこの講座のために作られたグループではあるが、これを契機に、ボランティアと一緒に何かを実現したいとの思いも強い。行政としても、今後新たな展開が期待できるこのグループの活動を支援していきたいと考えている。

私自身も駆け出しの新米であるにも関わらず、10年度の講座の担当を任せられ、カリキュラムの意図も把握できぬままのスタートであったが、講座は私自身の学びの場となった。受講者の生の声を聞き、驚きと発見の連続だった。「ひとこと感想」は受講者自身の振り返りの時間と同時に、講師や私を含めた関係者の振り返りでもあった。

「入門講座」終了後に結成されたグループの活動として、苦しみながらもようやく初回のワークショップ開催に漕ぎ着けたが、初めての試みということもあり、実施内容や募集方法は手探りの状態だった。しかし、“とにかくやってみよう”という全員の思いで実施した結果、子どもたちの楽しそうな様子や親同士が親しく交流しているのを見て、グループのスタッフは達成感を感じたようである。

また、参加した子どもたちの多くは、学校へ配布したチラシではなく、口コミで集まった。改めて、人と人とのつながりの大切さを知った。さらに、子どもた

ちの間に仲間意識が生まれ、共通語としての日本語を使って仲良く遊ぶ様子が見られたことは、我々が期待した姿であった。

このボランティアグループは、本年度の2つの講座受講者が多かったことから、「居場所」の考え方は共有され目指すものは一致していた。これは、講座の成果であり、「居場所」に近づきつつある会が現在進行中であると確信している。

5 今後の課題

このように講座受講者を柱とした新たなボランティア活動が動き出したが、この活動を継続していくには、運営の方法や費用の問題は避けられない。現在は、行政が主導している形になっているが、今後は彼らの自立を促し、まちづくりの視点からも市と協働していくことが望ましいと考えられる。さらに、中間支援組織として発足した上田市多文化共生推進協会と密接な関係を持つことも望まれる。ある地域日本語教室のボランティアからは、楽しい活動は必要だが、子どもに必要なことは日本語を学ぶということだ、との意見ももらった。第二世代育成の観点からすると、生活と学習の基礎となる日本語習得と併せて、アイデンティティーの確立やキャリアデザインに結びつけていくことが重要である。そのために、どのように活動を進めるかは大きな課題である。

「入門講座」のワークショップにおいて、自分たちが行えそうなボランティア活動を発表する中で、あるグループは、「学校で外国籍児童の支援としてボランティアが活動する」との意見があった。こういう場合、とかく性急になりがちであるが彼らは「まず、自分たちが学校において何ができるのかを考え、それを学校側へ伝える。学校側で十分検討してもらい、信頼関係を築きながら自分たちが学校に入っていく」というものであった。決してすぐにはできないことではないことだが、地域や日本語教室の中にも「居場所づくり」に向けての活動の広がりができていくことが理想と考える。

「入門講座」の受講申し込みの状況を見て、何らかのボランティア活動をしたいとの思いをもっている人が大勢いることに驚かされた。今までの取り組みにより、市民の関心が高まっていることが窺われる。しかし、講座終了後の活動に参加するのは少数である。ボランティアに対する考え方は人それぞれに違うので、私をもっとコーディネーターとしての役割を果たしていれば、より大勢の人をさまざまな形でボランティア活動につなげることができたのではないかと後悔している。このことは、これからの私自身の課題である。

教育委員会嘱託で市民課兼務となっている堀之内（P.84 参照）は、10年4月

から学校訪問を行ってきているが、外国籍児童の学力の低さを目のあたりにし、彼らの将来に不安を覚えると述べている。「第二世代育成」は待ったなしの課題であることを肌身で感じ、少しでも前に進まなければならないと思っている。それには、私自身が模索状態から抜け出すことと、サポート隊のような当事者や、外国につながる子どもをサポートするボランティア達の活動を見守りながら、地道な活動を継続していくことが求められている。

おわりに

私が、この上田チームに初めて参加したのは、10年6月21日の四谷での研究会だった。予備知識がほとんどない私は、その時の話の内容が高度すぎたことから「ここは、私の居場所ではない」と感じていたが、参加を重ねる中で、研究者の皆さんの応援もいただき、いつしか「居場所」へと変わっていった気がする。同じテーマでずっと議論してきたことが、私の中にも共通の認識を芽生えさせ、徐々に距離間が縮まってきたものと思う。私が感じる「居場所感」は、実践におけるバックボーンとなり、ひいては自信につながった。職場内においても、上司と課題や政策について共有できつつある。協働実践研究から、研究テーマへの取り組み以外にも得られたものは大きいと実感している。

[注]

- ¹ さまざまな事を禁止されていたブラジルの奴隷達が、音楽にあわせダンスにカモフラージュしながら練習していた格闘技、護身術が元になってできたと言われている伝統芸であり、スポーツ。
- ² 適当に散らばって、近くの人とジャンケンをする。負けた人は、勝った人の後につく。勝った人は、また近くの人とジャンケンをして、負けた人は、勝った人の後ろにつく。これを繰り返して、最後に先頭となった人の勝ちになるゲーム。
- ³ ドッチボールのルールで、ボールの代わりにフリスビーのような柔らかい円盤で行うゲーム。
- ⁴ サンバやランバダ、ボサノバなどがミックスされていて仲間たちと一緒に楽しく踊るというスタイルのソロダンス。